

活動報告書

報告者氏名：稲田 ひろみ 所属：延岡しろやま支援学校 聴覚障がい教育部門 中学部

記録日：平成26年2月12

【対象児の情報】

- 学年 聴覚障がい教育部門 中学部3年 男子生徒
- 障害名 感音性難聴、発達障がい
- 障害と困難の内容
 - ・感音性の難聴のため聴力が非常に厳しい。裸耳（右134dB, 左125dB）装用（右94dB, 左95dB）
 - ・広汎性発達障がいと自閉的傾向にあり、親しい人以外とのコミュニケーションは苦手である。
 - ・コミュニケーション手段は、手話、筆談であるため聴者社会の中では特に思いを伝え合うことが困難である。

【活動目的】

- ・当初のねらい 手話の分からない人とでも、iPadで意志の交換などに通じる言葉が必要。iPadのツールを活用したコミュニケーション手段を身に付ける。
- ・実施期間 平成25年4月～
- ・実施者 延岡しろやま支援学校 聴覚障がい教育部門 中学部 稲田ひろみ
- ・実施者と対象児の関係 副担任

【活動内容と対象児の変化】

- 対象児の事前の状況
 - ・見通しをもたせ、目標があるとそれに向かって活動ができる力をもっている。
 - ・漢字が大好きで、なんでも漢字に変換する。難しい漢字の読みも分かる。
 - ・手話ができ慣れた人には、相手の話を受け入れて理解しやりとりができる。手話の分からない人や手話は分かるが対象児とあまりかかわりのない人とのコミュニケーションは手話表現の違いがあるのか、やりとりが続かず伝える気持ちがあっても手段として手話が有用でない場合がある。

○活動の具体的内容

①思いを伝え合うツール

「こえとら」「iplywalk」「paper」



②活動のツール

「ロイロノート」



③学習のツール

「筆順辞典」「マップ」



「筆談パット」「VML SHOW」



「google earth」「keynote」



○対象児の事後の変化

①について

- ・今までは、手話でコミュニケーションをとっていたが、聴者社会に出て手話で会話ができない環境を想定して筆談でコミュニケーションをとる方法に取り組んだ。初めは戸惑ってイライラしていたが、分かることが増えてくると次第に筆談でやりとりすることができるようになってきた。家庭でもiPadを使って

母親と一緒にハンバーグ作りをして、やりとりができた連絡帳に書いてあった。パソコン操作は得意なのでiPadも飲み込みが早く、すぐにできるようになった。



*「こえとら」でのやりとりをしている様子
先生の質問に答えて、自分で操作している。



- **iplywalk** を使って、作文や日記をみんなの前で発表した。手話の分からない人でも音声があるので内容を理解することができた。また、**VML SHOW** を使って、ちょっとした会話や相手に伝えなければいけない内容、お願い等を音声で伝え、やりとりすることができた。
- 3学期の作文学習発表会では、二題のiPadを使って、一方の**ロイロノート**に作文の原稿を一文ずつ入力し、もう一方のiPadで**iplywalk**の音声をロイロノートに録音し編集しました。そのおかげで、生徒自身も**ロイロノート**を操作しながらスムーズに発表する事が出来ました。また、聞いている生徒達もiPadから流れる音声を聞き取れることができました。この方法はすごく有効であった。



- * **keynote** を使って、体験学習のプレゼンを作成。みんなの前で、iplywalk で音声に替えて発表をする。
- **paper** では、自分の思いを伝えるツールを選んで、伝える手段を学習した。初めは、どのような文章で伝えなければいけないのか分からなかったが、日常遣うであろう言葉を文章化して、**paper** に入れておき、その中から今、自分が伝えたいことを選んで表示することができるようになってきた。



* 様々な言葉を文章化して表示している

②について

・ロイロノートに自立活動や作業学習で活動する内容を掲示し、導入時に説明するとそれを見ながら活動することができるようになってきた。また、授業後の振り返りとしても活用することができた。



*作業学習で一閑張りを作る様子



*自立活動での体幹訓練の画像を見ながらおこなう。



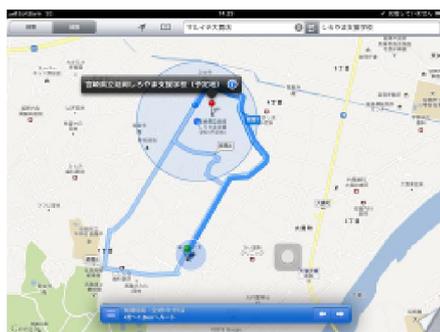
③について

- ・筆順辞典を活用し、分からない漢字の読みや筆順を調べたり、確認するのに活用することができた。間違っ
て筆順を覚えていたりしていたのですごく分かりやすかった。書き順を覚えることで漢字の定着ができた。
- ・買い物学習での事前の調べ学習で位置確認をすることができた。また、歩きながら経路が表示されるので、
知らない場所でもスムーズに進むことができた。



*筆順辞典を使って、漢字の筆順や読みを確認する。

*漢字の意味を調べて漢字リストを作成する。
漢字の意味を絵にかいて覚える。



*買い物学習の事前指導でマップを見ながら、位置確認をする。

*買い物をしている様子

【報告者の気付きとエビデンス】

○主観的気付き

対象児は視覚情報があることで理解の度合いが変わってくる。指導する上でも、手元に iPad があることで、教材研究（特に写真を探す・準備する）を効果的にできるようになった。さらに手元に検索機能がついているタブレット端末があることで視覚情報を増やすことができ、分かりやすく言葉を説明できる場面が多くなった。学校備品の PC は持ち運べないため、iPad はいつでもどこでも持ち出せるコミュニケーションツールになった。また、iPad は授業の補助的手段としてとても重宝するものだと考える。

対象児の 5W1H 理解についての度合いは、2 語文～3 語文で長い文章になると理解が難しい。指導者とのやりとりをしていく中で理解していくようである。また、助詞の使い方も時折、間違った表現をすることがある。しかし、iPad を使って自分の思いを相手に伝える手段を学習したことで、相手に頼み事をする時など、**iplaywalk** を使って伝える手段を学ぶことができた。例えば、教室の時計が止まってしまい、新しい電池を交換するために対象児と関わりの少ない事務室の先生に対して「時計が止まったので、新しい電池を下さい。」とお願ひし、電池をもらうことができた。自分の思いを伝えることができ、とても嬉しそうであった。

このような、取組をしていく中で、本人にも少しずつだが、変化が見えてきた。今までは、手話で話せば何でもわかる環境にあったので、iPad を使って伝える必要性がなかった。初めは、iPad を使って筆談することに前向きでなかったが、分かることが増えてくると少しずつではあるが、抵抗なく取り組むようになってきている。そして、自ら自分の気持ちを発信したいという気持ちも育ってきている。このような取り組みをしていく中で、手話だけでなく、伝えたい気持ちを文章に書くことで手話が分からない人に対して、より分かりやすく伝える手段を身に付けるきっかけになってきたように思う。

○気づきに関するエビデンス

現在は学校に通って、手話のある環境で過ごしているが、高等部を卒業すれば、手話の環境が整っていない社会（作業所や施設）に出ることになる。今は、手話だけで通じることが、これから社会に出ると手話の他に筆談やジェスチャーも要求される。そのことを踏まえて、手話だけではないコミュニケーション手段を身に付けられるように取り組んできた。手話で話せばすぐ分かる環境から、あえて手話を使わない環境を作り、生徒からの発信を促してきた。

○今後の見通し

今後は、「筆談パット」、「こえとら」、「iplaywalk」、「paper」の活用の場面を広げ、自ら場面や状況に応じて様々な思いを伝えたり、共有したりして、たくさんの人たちとコミュニケーションをとれるようにしていきたい。しかし、彼の特性から関わりの少ない人に対する関心の少なさがあるので、上記のツールを用いる際に場の設定は非常に大切になる。生徒にとって負荷が大きくなり過ぎずに成功体験の積み重ねが感じられるようスモールステップで場の設定をしていきたい（高等部進学、地域での関わり等）。それにともない、手話だけでなく、筆談でも会話ができるように学習や生活の中で体験させ身に付けさせていきたい。そして、自分でその場の状況に応じた iPad の操作方法を習得して欲しい。また、対象生徒からの一方的な発信にならないように、（やりとりをしていく上で、会話が成立するように、）①相手の顔を見て伝える。②「お願いします。」「ありがとうございます。」と初めと終わりに言うなどの iPad を使う際のルールを決めることも重要になってくる。もちろん手話も使って会話をするが、足りない部分を iPad で補い、コミュニケーションを豊かにするツールの一つとしての位置付けを定着させていきたい。